



教職大学院

Newsletter

No.

111

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2018.5.19

GINZA SIX（ギンザシックス）で探究する

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科教授

福井大学教育学部附属義務教育学校副学園長

三田村 彰

東京銀座六丁目の松坂屋銀座店跡地を含む1.4haを再開発して、2017年4月にGINZA SIXが開業しました。この商業施設には、240を超える店舗が出店しており、「フェンディ」や「ディオール」といった世界を代表するブランドが顔をそろえています。

このGINZA SIXを、探究学習のテーマに選んだ都内の私立高校2年生がいます。彼らは、1年生から3年生までを通して、「自分たちが住む街づくり」というテーマで、プロジェクト型の学習を始めています。3年生になると、地元神社の大祭に出店して利益を上げることが計画されています。そのために、利益を上げている地域の商業施設を成功モデルとして学んでみようという発想です。ところが、開業2年目を迎えた2018年4月、彼らを驚かせる記事が新聞に掲載されました。「GINZA SIXが開業2年目で迎える正念場、オープンから1年未満で撤退するテナントも」こんな見出しが紙面を踊ります。彼らが成功モデルと信じていたGINZA SIXに何が起きているのでしょうか。

同じ時期に、大阪の百貨店にも驚きが広がりました。大阪うめだは、阪急・阪神・伊勢丹が激しく競争する百貨店の激戦区です。この地域の百貨店もそれぞれに生き残りをかけて経営戦略を練り上げています。当然、彼らもGINZA SIXを成功モデルとして注目しています。彼らには企業の生き残りをかけて、GINZA SIXを探究する必然性があるわけです。

高校生たちは、4月の休日にGINZA SIXに調査に出かけました。私も調査に同行しましたが、高級感あふれる店構えが話題となり、連日、多くの顧客が押し寄せています。特に目立つのは、外国人客で、店

内では英語や中国語などさまざまな言語が飛び交っています。店頭では、記念写真を撮る外国人もいます。高校生たちは、教室に戻り議論を始めました。

「あんなにお客が集まるのは、お店に魅力がある証拠だ。」「お店を見て歩くだけでも楽しくなる。」その議論に、3年生が加わりました。3年生は、昨年ユニクロの経営を学んでいます。「GINZA SIXは観光施設として集客力は抜群でも、商品を購入している顧客はそれほど多くないのではないか。」こんな意見が出てきましたが、2年生は答えることができません。確かに、周辺の銀座三越や松屋と比較して、GINZA SIXでは商品を持って帰る客が少ないような気がします。「GINZA SIXに来店する客の何パーセントが商品を購入しているのかを調査してみよう。」ということになりましたが、どのように調査するのが良いのか、正しい調査結果を出すためには、何人にアンケートする必要があるのか、分からないことばかりです。

この私立高校の若い先生たちは、2年前から教科の枠を超えて授業づくりを話し合うコミュニティを

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ 自己紹介 (3)
- 院生 自己紹介 (5)
- インターンシップ/木曜カンファレンス報告 (11)
- 4月合同カンファレンス報告 (16)
- 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions (20)

作り始めています。この中で、2年生の調査をどのように支援するかが話し合われました。数学科の先生が「統計に関する授業を5月にやってみよう。」と言い出しました。国語科の先生が「1年生の時、アンケートのつくり方を授業で少しやったことがあるので思い出させてみよう。」と言ってくれました。理科の先生は、調査データを分析する力を育てる必要を感じています。家庭科の講師の先生は、大学時代に学んだことがある「消費者心理」が役に立つかもしれないと思いついています。この高校では、カリキュラムマネジメントの考え方がすでに芽生え始めています。2年生は、先生たちの支援を受けて、6月にGINZA SIXの顧客に対してアンケート調査を計画しています。来年の大祭に向けて出店計画を練り上げる学習過程で、高校生はどのように学びを深めることができるのか楽しみです。

さて、大阪の百貨店の動きはどうでしょうか。彼らは、GINZA SIXが開業した時、GINZA SIXの経営陣が年間の目標売上額を、銀座の売り場面積が同じ程度の百貨店の売上額より100億円程度低い数字に設定していることに疑問を感じていました。通常の百貨店には、在庫のリスクを伴わない「消化仕入れ」と呼ばれる特殊な商慣行があるそうです。商品が売れた時に、仕入れと売上げを同時に計上する取引形態です。そのため、百貨店は店内にできるだけ多くの種類の商品をすべての色やサイズを取りそろえ展示することに力を入れます。たとえば、エスカレーター周辺のデッドスペースは、いつもセール商品がワゴンに山積みされています。百貨店は、売り場面積に対する売上額を競い合っているわけです。

ところが、GINZA SIXは最初から売り場面積に対する売上額の競争で、敗北宣言をしているようなものです。この疑問を解くために、大阪にある百貨店の中堅社員は、会社に勤務しながら、MBAに入学して院生として学び始めています。彼らは、他業種の院生とチームを組み調査を重ねています。GINZA SIXの経営陣へのインタビュー調査では、GINZA SIXはショッピングモールと同じように、各テナントと定期賃貸契約を結ぶ「場所貸し」に徹した形態を採用していることが分かりました。つまり、テナントは百貨店のように全ての商品を品揃えする必要はなく、顧客に商品の品質を確かめてもらい、自分に合ったサイズを選ぶために必要な品揃えをすればよいことに気づきます。そのため、売り場はゆったりとしたスペースが確保でき、高校生が調査したように、お店を見て歩くだけでも楽しい雰囲気が演出できることを

学びます。販売員は、顧客が選んだ製品の色やサイズをネットで注文し、顧客の自宅に配送する手続きをするだけです。いままでの百貨店では、まったく考えられない経営方法です。さらに、テナントの売り上げに応じた歩合の賃料も受け取ることができるように工夫されています。つまり、百貨店としての売上額を競争するのではなく、各ブランドの売り上げが増加すれば、自動的にGINZA SIXも利益を上げることができる仕組みになっているのです。それなのに、なぜ新聞で報道されたように相次いでテナントが撤退するケースが想定されるのか。彼らは、この新しい問題について、高校生と同じように新たなチームを組んで調査を開始しています。今年の秋、大阪うめだの百貨店は、どのように生まれ変わるのか、専門家の学びの深さが試されることとなります。

今回は、GINZA SIXで探究することを通して、高校生の学びと企業を運営する専門家の学びに共通する点があることを発見しました。協働の学び、学びの必然性、深い学びを支える学習環境、学びに対する評価など、私たちの教職大学院の学びにもつながるものばかりです。

スタッフ 自己紹介



淵本 幸嗣 ふちもと こうじ

4月1日付で連合教職大学院の教授として着任いたしました淵本幸嗣と申します。3月までは、福井県教育庁企画幹(義務教育)として勤務しておりました。教職人生

38年間の歩みは、幼小学校の勤務が2年、中学校21年、県教委12年、教職大学院3年ということになります。

平成19年に福井大学が教職大学院を開設するというので、教頭職から実務家教員として3年間福井大学で勤務しました。記念すべきニュースレターのNo. 1では、森透先生、石井パークマン麻子先生と並んで私も自己紹介をさせていただきました。それで、今回の自己紹介は、2回目となります。約11年の時を経てニュースレターもNo. 111となりました。数字の1がきれいに並ぶ号で開設当時の思い出を少し振り返ってみたいと思います。

初代の専攻長の寺岡英男先生は、新しい専門職大学院の開設に向けて、「新しいワインを入れるのには、古い容器ではなく、新しい入れ物を用意しないといけない。」「教職大学院は、羊頭狗肉であってはならない。」とおっしゃっていました。「古いスタイルの大学院の看板を教職大学院に書き替えるだけはいけない。新しい専門職大学院を学校現場と共に創るのです。」という言葉の中に確かな覚悟を感じました。

開設当時から、若い研究者たちと一緒に学校を丁寧に訪問しました。大学を拠点とするのではなく、学校を大学院の拠点とする学校拠点方式は、当時、斬新でマスコミからも脚光を浴びました。子どもたちの学びを大切にし、教師や学校のリズムを尊重して、長期にわたり協働実践を進めるメンバーの一員になったことに対して、私はかなり興奮もし、やりがいを感じました。

当時の思い出の一つとしては、教員免許更新制導入への取り組みが上げられます。他大学のように一般的な講義形式を中心にするのではなく、ドナルド・ショーンが提唱する「実践と省察」を重視したスタイルに教員免許更新講習をデザインできないか

という刺激的なチャレンジを柳澤昌一先生と知恵を出し合って創り上げました。県教委の新任教頭研修と教員免許更新講習を関連付けて、教頭先生方に大学に来ていただいて、ファシリテーター役を経験してもらいました。全国でも類を見ない大学と県教委のコラボレーションで、大学と県教委との実効性のある連携のエビデンスとなるシステムの構築です。

平成19年からの3年間の教職大学院での学びの日々は、とても充実したものであり、あっという間に終わりました。私は再び県教委に戻り、教員人事関係の仕事を経験した後で、教職大学院の拠点校である至民中学校の校長になりました。教職大学院開設時から至民中学校の担当をしていたので、不思議なご縁を感じました。その後、三度目の県教委勤務となり、企画幹(義務教育)という役職で、義務教育や幼児教育等の幅広い業務に携わりました。福井県教育振興計画を立てたり、その具現化に向けた予算獲得をしたりということが大きな仕事でしたが、学校や子どもたちの応援団として、いかに教育環境を整えるかを念頭に置いて力を注ぎました。全ての子どもたちの幸せを願い、全ての子どもたちの可能性を拓くために、仲間と共に懸命に頑張る日々は、学校づくりに汗を流した学校での日々と重なりました。

義務教育において、福井県の子どもたちの学力や体力の水準の高さが話題になります。多くの要因があると思いますが、私は教師教育の視点や自主的・実践的で協働による授業研究の積み重ねによる歩みを見落としてはいけないと思います。校長先生も一般の先生方も常に学び合う学校づくりを大切にし、授業研究に励んできました。教育行政としては、学校現場をリスペクトし、決して学力偏重になびくことなく、学びの土台である読書、体験活動、本物を味わう芸術活動等に予算をかけて、一人ひとりの頑張りや突破力を支えてきました。

また、福井県では、小・中・高・特別支援の校種間交流が当たり前になっています。壁を越えて学び合う文化が日常化しているのです。このような人事交流による人づくりのシステムも福井県の強みの一つで、互いの顔が見える小さな県だからこそできることであります。

今回の勤務では、前回開設されていなかった学校改革マネジメントコースの院生と関わる時間が増えました。このコースの学びで特に重要なことは、院生の勤務校の校長とのコラボレーションです。院生は、校長の学校づくりを支え、前に進める有力なスタッフの一員です。その学校改革が教職大学院での学びの中核になります。大学院のスタッフのメンバーもその一員として学校に出向いて協働実践を支えますが、勤務校の校長にこのことを十分理解してもらう必要があります。

組織と組織を結びつけるためには、人と人との関わりや信頼関係が何よりも大切になります。学校と大学と教育委員会の関係が良好な福井だからこそ、

ウイン・ウイン・ウインの関係の化学変化を楽しむことができると思います。質の高い教師教育のために、今一度ギア・チェンジをして、大変やりがいのあるプロジェクトに参画したいと思います。

教師教育は、私のライフワークであり、今回、2度目のチャンスをいただきました。幼稚園、小中学校、県教委、大学院という様々な分野で教育に携わってきた私のこれまでの経験が、少しでも次の世代の役に立つのであれば幸いです。連合教職大学院になり仲間も増え、海外展開で外国の管理職との交流も始まります。グローバルな時代の中で次の10年を見据えて、新たなチャレンジをしていきたいと思えます。



柘植 良雄 つげ よしお

昨年度（平成29年度）より、この連合教職大学院でお世話になっています。今年度、岐阜聖徳学園大学からの院生は、M2が1名、M1が2名の計3名です。また、教員は3名が担当をしております。

私は、実務家の教員で、岐阜県の小中学校の校長を定年退職した後、大学に移り今年度で6年目を迎えております。元々は理科の教員ですが、大学では、生活科、総合的な学習の時間などの初等教育を中心として、教科教育法、教職実践演習、教育実習特講などを担当しています。また、本学教育学部の就職委員会のまとめ役として、特に教員採用に関わる学生の指導に携わっています。これは、かつて私が県教育委員会で、教員採用や教員人事などの人事管理を長年担当していたことによります。大学では授業の他に、教員免許更新講習なども担当しておりますが、県内外の各市町教育委員会や各小中学校から講演や授業指導などで声をかけていただくのは、多くが学校経営や学級集団づくりに関わる内容です。

小学校では、新学習指導要領への移行1年目がスタートし、指導方法の改善として主体的、対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）に研究的に取り組む学校があちこちで見られるようになりました。

また、カリキュラム・マネジメントによる指導内容の重点化や、学校教育目標達成のための効率的な学校行事の設定などに、本格的に取り組もうとしている学校もあります。そして、そのために子供と子供、子供と教師の望ましい人間関係の醸成が必須の課題であると考えます。つまり、新学習指導要領の趣旨を徹底するためには、これまで以上に学級を中核とした学ぶ集団の育成に力を入れ、そのためには成員の良好な人間関係をつくらねばならないということです。

私が、最後に校長を務めた小学校は、昭和46年から学校の研究主題「実践力のある子どもの育成」を掲げ、集団づくり（特別活動）を実践研究している学校でした。もちろん各教科・道徳などは、それを基盤とした研究ということになります。岐阜県内では、現在もこの学校のみが特別活動の研究を50年近く続けている唯一の学校です。私は、この学校で教諭時代を含め通算15年間勤務しましたが、校長で赴任した時に、なぜこの学校で特別活動の研究が始まったのかを、過去の出版物等を基に改めて調べたことがあります。

この学校は、学制発布以来の学校であり日本で最も古い学校の一つです。前身は藩校であり、校長室には今でもその校名表札「憲章学校」が飾ってあります。昔から女子師範学校の教育実習を行った学校

で、戦後は独自のコアカリキュラムを作成した学校でもあります。当時より教育実習生の研修校であったことから、各教科の研究は盛んになされ、学校の出版物は多く出されています。ところが、昭和40年代の出版物や研究紀要には、教科指導における子供たちの高まりには限界があるということを述べています。つまり、子供たちに教科の力をつけるには集団の力を通して高めることが必要であり、そのためには（学級）集団づくりこそが学校教育の基盤であり、現在の学級活動の内容にあたる適応指導が大切だと述べています。新学習指導要領の資質・能力の育成に集団の力が欠かせないのと同じ論理を、昭和40年代前半に研究の成果として述べています。このような学校に長年勤務した経験や小中学校の長い校長経験から、特に学校経営や（学級）集団づくり等に関する実践的な面で、多少なりとも現役の先生方のお役に立てればよいと考えております。

最後に、岐阜聖徳学園大学教育学部の紹介をしておきます。本学の学生は明るく真面目で、ほとんどが教員を志望して入学してきます。ここ数年は、卒業生が毎年380名前後で、およそ8割弱が教員採用試験を受験します。昨年度は、その中で受験生の62%が現役合格し、学部全体での教員就職率は75%前後です。数年前は8割を超えていましたが、最近は、一般企業や一般公務員を志望する学生が増え、教員就職率は徐々に減少傾向にあります。本学は、教育学部以外に外国語学部、経済情報学部、看護学部、短期大学部がありますが、本学のような小さな私学では、どの学部においても、学生の就職率はとても重要なものになります。今後も高い教員就職率を維持し、優秀な教員を一人でも多く学校現場に送り出したいと考えています。いろいろお世話になりますが、どうぞよろしく願いいたします。

院生 自己紹介



柘津 由紀子 ねづ ゆきこ

今年度ミドルリーダー養成コースに入学いたしました柘津由紀子です。これからどうぞよろしく願いいたします。

幼稚園教諭として7年目になりました。初任から神奈川県川崎市にあるカリタス学園カリタス幼稚園に勤めています。カトリックの私立幼稚園で、イタリアで生まれたモンテッソーリ教育をする3～6歳の異年齢縦割りクラスです。同じエリアに小学校と女子中学高等学校があります。幼稚園を卒園した子の多くが内部進学しているため、毎朝校庭で遊ぶ卒園児に会い、運動会や学習発表会等の機会でも子ども達の成長を卒園後も近くで見守り続けることができるのが幸せです。

私は幼少期から音楽が好きで、大学は教育学部の声楽専攻で学びました。オーケストラサークルに所属したり、少人数アンサンブルをしたりと学生時代は演奏活動に打ち込んでおり、将来は音楽に関わる

仕事をしたいと思っていました。そんな時、とある講義がきっかけで幼児教育の可能性に興味を持ち、幼児期という人間の基盤にあたる、重要な時期に携わってみたいと思うようになりました。卒業後はモンテッソーリ教育教師の資格取得のため学校に通った後、ご縁をいただいたカリタス幼稚園で私の教員生活が始まりました。結果として、大好きな音楽に関わりたいという思いも、子ども達と日々の保育で歌ったり楽器あそびしたりするなかで叶えることができているので、恵まれた環境にいるのだなと感じています。

今回大学院に通うにあたり、これまでの保育を見直し、園や学園全体での取り組みにも目を向け、既に取り組み始めている様々な改革に同僚とともに着手していきたいと考えています。幼児期の子ども達にとって、基礎を築いていく大切な時期に関わるあらゆる環境が（物的にも、教員という人的な意味でも）重要だと考えています。元々子ども達のなかにある無限の力をたくさんの実体験のなかで子ども達の

力によって引き出し、これからの予測できない社会を色々な人たちと繋がり協同して困難を乗り越えていく力や豊かな人間性の基礎を幼児期に培っていくことができるよう、まだまだ未熟である自身の実践力を高め、視野を広げていきたいです。また、カリタス学園は一貫校ですので、カリタスファミリーとして小学校や中学高等学校との連携や接続に力を入

れるために、自分ができることは何かを考えていきたいと思っています。

大学院では様々な校種や経験豊富な先生方のお話や実践事例から、たくさんの気づきを得て1つでも多くのことを学んでいきたいと思っています。ご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。



小川 知恵 おがわ ともえ

①これまでの歩み

松本児童クラブで支援員として働き、昨年度はさくら認定こども園(以下さくらと称する)で、5歳児担任として保育に取り組む。児童クラブでは、従来の子どもの安全を一番に考え、常に大人の目が行き届くよう構成されたタイムスケジュールの中で、どこまで子どもの気持ちに寄り添った時間を作れるか、模索する日々だった。与えたものや決められた遊びで時間をつぶすのではない、一人一人の子どもの思いが叶えられ、好きなことができる時間の確保を目指してきた。

あるときは、おもちゃの恐竜の卵がうまく孵化せず「なんでだろう?」「僕たちで作れないかな?」という子どもの声を拾っていくうちに、様々な材料・食品を使った恐竜の卵作りへと発展していった。活動に取り組む子の目は好奇心に満ち、こちらが引っ張られるほどのエネルギーを持っていた。どうしたら退屈そうにしている子どもの目を輝かせられるかを考え、子どもの気持ちに寄り添うことを大事にしてきた。

②現在の職場について

子どもが主体となる保育を目指し、さくらでは従来の保育方法の見直しが行われている。日々の保育活動が、保育教諭が主となり、子どもを引っ張りすぎるものになってはいないか。子どもの声・つぶやきを拾い、そこからはじまる活動であるか。一つ一つの場面で丁寧な見直しが求められる。

その中の一つ、プロジェクト保育は子ども一人一人の興味からはじまる保育を目指したものだ。何かを作り上げる過程にこそドラマがあり、学びがあるのだと考え、好きなことに全力で取り組む子どもたちを見守る。夏祭りでは、従来の大人が作り上げ子どもに与える祭りの場ではなく、子どもたちが自ら

作り上げるイベントとして、子どもと共に悩み失敗しながら祭り作りに取り組んだ。「流しそうめんがしたい」というひとりの男の子の思いからはじまった流しそうめん作りでは、雨樋を買いに行くところからはじまり、どうすれば水が無駄にならずに糸が流れるか、何度も衝突を繰り返しながら当日を迎えた。子どもたちの中には夏祭り以降も強く残り続け、日々の生活の中にも流しそうめんに関連する遊び、つぶやきがあった。これらを拾い、子どもたちが作り上げる運動会の種目、流しそうめんのリトミックが出来上がり、これを披露した。

また日々の絵本の読み聞かせから、絵本プロジェクトも発動した。これも絵本に出てくるシーンを再現し作り出すだけで終わらず、卒園制作、発表会へとつながっていった。

はじめはさくら改革に疑念を抱く親も少なくなかった。なぜ保育を変える必要があるのか、新たな保育を目指し、その先に何かがあるというのか。従来のさくらの保育を支持してくれていた親にとって、行事の見直しは理解に苦しむものであり、園をよくしようと思ってきているからこそ、様々な考えを持っていた。

しかし日々園で生活をする子どもの姿が変わっていくのを通して、いつしか保護者が、新たな保育の可能性を受け入れ始めてくれたのではないかと感じている。日々の保育の「見える化」にも力を入れ、写真や言葉で日々の子どもの学び、成長を保護者へ向け伝え続けている。

③教職大学院で深めていきたいこと

私たちには、子どもの将来を見据えた保育行う責任がある。子どもの保護者に、私たちの保育は将来につながる保育をしているのだと発信し、安心して園に子どもを預けてもらう必要がある。

幼児教育は義務教育の入り口と叫ばれる今、小中高等学校との連携を図り、一貫した教育の流れをつか

むと共に、将来を見据えた保育を展開していきたい。また、保育教諭としての資質、専門性の向上を目指し、更なる保育内容の見直しと、それに伴う発信に力を注ぎたい。仲間や保護者、他園や学校の教育者

との関係を築き、子どもの育ち、成長を見守る共有者となる道を開いていきたい。



松田 知峰

まつた ちほ

今年度より、ミドルリーダー養成コースに入学いたしました松田知峰です。どうぞよろしくお願いいたします。

福井市にある認定こども園 福井佼成幼稚園に勤務しています。

私は、仁愛短大音楽学科専攻科修了後、音楽教室に講師として10年間勤務し、子どもから大人までの個人レッスンのほか、乳幼児のグループレッスンを担当していました。子ども達との『集団と個々』のふれあいや保護者との関わりを通して、これらをもっと深く、専門的に学び、資格をもって働きたいという思いが強くなり、32歳で再び同短大幼児教育学科に社会人入学いたしました。勉学と家庭や子育ての両立に不安を抱えながらも、自分が本当に学びたいことを学べる喜び、楽しさ、満足感は大きく、振り返れば無我夢中で取り組んだ2年間でした。当時から今もなお、家族をはじめ職場や地域の人々、友人たちの協力を得ながら毎日を送り、保育者としての道を歩めるように支えていただいています。

さて本園では、2年前から園全体で保育改革や保育者の意識改革を進め、園内研修の一つとして、遊び込む日（なかよしタイム）を設定し、子ども達が遊

びに夢中になれる環境をつくり、さらには次なる遊びにつながるように、振り返り（みんなの時間）を子ども達と行っています。また、もっと人とのつながりや温かさを感じられる心が育つことを願って、異年齢交流を深めています。現在、私が担任をしている5歳児の子ども達は、小さい子たちのお世話を通して、「赤ちゃんが僕を見て“ニコッ”ってくれた」「明日もお昼寝トントンしてあげたい」と大きな喜びを味わい、それと同時に保育者間でも“みんなで子どもを見守る”という意識が芽生えたのを実感しています。

何より子ども達のことを一番に考え、子どもの心や発達に理解を寄せながら“どのような力を育てようとしているか”といった『子ども主体』という新しい風が吹き始めたことで、以前は業務的で少し閉鎖的だった職場に、明るさやぬくもりが感じられるようになりました。この現状に甘んじることなく、職員全員の保育への思いのベクトルを合わせ、さらに向上していくための機動力になりたいと思ったことが、この教職大学院入学のきっかけとなりました。多くの先生方から吸収したことを園に持ち帰り、これからの実践・省察に生かし、園全体の推進につなげていけるよう一生懸命がんばります。よろしくお願いいたします。



河上 大機

かわかみ だいき

本年度より、教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学しました、河上大機です。専門は技術・家庭科（技術分野）で、取得している教員免許は、中学校技術1種と小学校2種になります。中学校勤務時は、「ものづくりは人づくり」をモットーに、ものづくりの楽しさを味わわせると同時に、ものを大切に作る心も育てるための授業実践や教材研究を行ってきました。最近

では、主に小学校勤務が多くなり、ものづくりに関わることは少なくなりましたが、代わりに思いやりのある心優しい「人づくり」をめざして、日々の教育活動を頑張ってきました。今年度は5年生の学年主任として、「優しく頼れるミドルリーダー」を目標に頑張っています。

さて、今から20年以上前になりますが、自分の大学時代（福井大学教育学部）を振り返ってみると、遊んでばかりいて、ほとんど勉強をしなかった4年間だったなど、今頃になって反省しています。また、

卒業研究で実践した「菊の茎頂培養」の栽培技術は、自分が教員になってからも、「施設がない」とか「環境が整っていない」などの理由から、あまり生かされたことはありませんでした。そんな中、講師時代、大変お世話になった先生が勧めてくださったのが、この教職大学院でした。「今更自分に研究などできるだろうか。」「勉強嫌いな自分がついていけるのか。」など、悩みも多々ありました。また、自分が今まで大学で遊んでばかりいて、真面目に勉強をしなかった分、「しっかり勉強しなさい。」と神様のお告げを聞いたような気さえました。そして、教職大学院について調べたり、話を聞いたりしていくうちに、どんどん興味がわき、最終的に進学の意味を固め、このコースで頑張ろうと思ったのが入学のきっかけです。まだ入学して1ヶ月しか経っていませんが、勤務しながら研究実践できる「拠点校方式」や、今日的な課題に焦点を当てた「協働研究」など、無駄のない教職大学院での学びは、本当に魅力的だと感じています。

話は変わりますが、今まで何度か福井大学総合研究棟（教育系1号館）の6階、コラボレーションホールに足を運んできて、ふと気がついたことがあります。それは、自分はいつもエレベーターを使わずに、階段を使って6階まで上がっていたことです。小学校に設置されているエレベーターは、主に給食の台車を運ぶための小さなものなので、階段を使う習慣が身に付いているのかもしれませんが。年齢も40半ばにさしかかろうとしているので、体力の衰え

を少しずつ感じている自分ですが、これから2年間の教職大学院での学びは、この研究棟の階段のように、一步一步確実に、そしてゆっくりと上っていくことができると考えています。そして2年後には、コラボレーションホールから福井の町並みを見おろしながら、自分が築き上げた研究の成果を噛み締め、これから上ってくる若い人達と一緒に、福井の教育や教職大学院の良さを共有したいと思っています。

自分が勤務する福井市中藤小学校は、新築移転6年目で、各教室前のオープンスペースや多目的スペース、ティーチャーズステーションなど、開かれた教育環境は本当に素晴らしいです。また、毎日たくさんの教職員や大学院生の人たちと関わり、学び合うことができるのも、中藤小学校の強みです。教職大学院でのこれからの研究は、期待感・高揚感でいっぱいです。

グローバル化や情報化、少子高齢化、いじめや不登校など、今日の課題は山積しています。そんな中、子どもたちに21世紀を生き抜くための資質・能力を育むことが、教員に求められている重要な課題であると考えています。そのためには自分も探求力を持ち、常に学び続ける気持ちをもって頑張りたいと思います。

これから2年間、どうぞよろしくお願ひいたします。



松本 亜耶子 まつもと あやこ

この度、ミドルリーダー養成コースに入学した松本亜耶子です。現在、高浜町立青郷小学校に勤務しており、今年で2年目になります。英語科教員として、中学校6年間の勤務を経て、

現在に至っています。初任者の頃は、日々の自分の授業を成り立たせるのに精一杯でした。先輩の先生方の授業を何度も参観させてもらい、自分の授業でも取り入れてみるのですがうまくいかないことが多々ありました。そこで考え始めたのが、生徒との関係づくりでした。ご自身が発行される学級通信を毎回私にも配って下さる先生がいました。どのようなことを考え学級経営をされているのか、子どもたちに向けて書かれた学級通信を読んで学びました。

子どもとの関わり方や教科指導の方法など、今まで多くの先生から学んできました。

教職大学院には今までも、町内で働く先生方が多く在籍されていました。前任校である高浜町立高浜中学校でも、大学院で学ばれている先生が何人かいらっしゃいました。ある先生は、私たちに定期的に「スクールリーダー通信」として学級経営や生徒指導等の方法や情報を伝えて下さいました。また、大学院の先生方を招いて、授業研究での子どもの学びの見取り方について研修会を行って下さいました。ある先生は、一つのテーマ（家庭学習の出し方や生徒指導等）について、教科や学年関係なく、気軽に話し合えるカフェのような場を作して下さいました。

一年前に異動してきた青郷小学校にも、大学院出身の先輩がおられました。授業研究として行われて

いたのが、高浜中学校でも行われていた子どもの学びの見取りでした。大学院での先生方の学びが、町内の学校で脈々と受け継がれてきていることがよくわかりました。

4月末に最初の合同カンファレンスが行われました。始まるまで不安を抱えての参加となりましたが、様々な方との出会いがありました。ストレートマスターとして、インターンシップを学校で行いながら学んでおられる方、学校現場で働きながらマネジメントの観点で研究をすすめておられる方、大学の先生方の中にも国内外を問わずいろいろな経験を経て

きた方がおられました。それぞれの今の立場や、今までの経験の中で語られる言葉には重みがありました。また、学校現場での課題や悩みの中には、自分と共通するものも多くありました。

これから2年間、「語る」ということを通して、自分の視野を広げ今までの自分の実践を振り返り、学んでいきたいと考えています。また、大学院での学びを職場の先生方と共有し、本校の教育活動に還元していきたいと思っています。

2年間、よろしく願いいたします。



伊藤 和幸 　　いとう かずゆき

今年度より、ミドルリーダー養成コースで2年間学ばせていただくことになりました。宜しくお願いいたします。

私は、岐阜聖徳学園大学附属中学校という、全校生徒 239 名の私立中学校で「教育研究部」の部長（教務主任）を務めている理科教員です。規模としては決して大きな学校ではありませんが、本校は教科センター方式を岐阜県下で初めて導入した中学校で、校舎も教科ゾーンをもつ回廊構造の教科センター型校舎となっています。また、授業で扱う単元の一部を、一人学びの学習方法である「パッケージ学習」として展開し、生徒がそれぞれ持っている多様な興味・関心を学習の中で活かし、個々に応じた学習を進めることができる教材開発を行なっています。

その中で、特に理科では、生徒の興味や関心を起点に理科を展開できるような教材を考えています。喩えるなら、10種類の料理をテーブルに並べて「好きなものを召し上がれ」（10種類の科学事象があれば、どれか1つくらいは興味が持てるだろう）ではなく、その生徒が好きな素材「野菜」「魚」といったものを使って、料理を1品つくる（興味のあることを中心として科学事象を学ぶ）というイメージです。この方法でパッケージ学習を始めて数年経ちましたが、一斉講義形式授業では見えてこない生徒の様々な個性がキラリと光るのは、いつでも本当に面白いものです。

ただ、問題点がないわけではありません。表現はよくありませんが「怒られるまでやってみる」というのが、私のやり方です。教師はついつい生徒に制限を加えたくくなりますが、それを必要に応じて幅広

く許容し、生徒の個性を少しでものびのびと活かせるようにしたいと考えてきました。すると、生徒の興味の起点が科学から離れることもあり、理科との接点を作ることが難しくなったり、また、理科の専門外の領域も増えてきます。どこからか見たことのない果実を採集してきて「これで美味しく料理したいです」と生徒から言われているようなもので、そこで指導をするためには、他教科の専門性や評価基準が不可欠であると感じるようになってきました。また、他教科のパッケージ学習を見ると、理科と同じ事柄を異なる観点で扱っていることもあり、同じ一つのことを学ぶのであれば、他教科との同時展開により多面的な学びが可能ではないか、そうすることで学習がより深まるのではないかと日頃から感じていました。これに関しては、以前に「音」を扱った授業で音楽と理科の合同授業を実施し、「楽器の発音原理を学び（理科）、演奏表現に活かす（音楽）」ということも行なっており、このときの生徒の反応から、この経験を活かして、「自分で楽器をつくる（技術）」「自分の楽器が発する音を楽器に施すデザインで表現する（美術）」というように、「楽器」という一つのものを中心に、多くの教科に展開できる可能性があると感じました。

こうした経験や思いから、私は少しずつ他教科連携授業を構想するようになってきました。しかし、そのためには、どの教科とどの学習項目で連携可能かを十分に検討する必要がありますし、その前提として、他教科がその必要性に共感することが欠かせません。また、教科等横断型授業を行なっていくことは、学校の授業自体を変えていくことにもなり、つまりはカリキュラムそのものにも手を加えなければなりません。現在の私には、そのようなこ

とを進めるために必要な知識も経験もなく、「やってみてほしい」「やらなければ」と思いながらも、なかなか踏み出せずにいました。

私が目指していること。それは、理科に求められている「科学的な問題解決能力の育成」を、「教科センター方式」「パッケージ学習」といった入れ物の中で「教科連携」を活用して実現させてゆくことです。多くの学校で実践経験を豊富にお持ちの先生方がいらっしゃるこの教職大学院で、自分が必要とする知識や経験を学ばせていただきたいというのが、私が今年度、この大学院の一員に加わらせていただいた動機です。ここで学ばせていただいたことを、2年間の自分の実践に活かし、そこから得られたものを、また次へと繋げながら、本校の理科を磨き上げていきたいと考えています。また、教務主任的な

役職にある身としても、学校全体にこういった学習を拡げ、あらゆる場面であらゆる教科が柔軟に連携し、生徒の資質・能力を育てていく、そんな学校をつくっていきたくと思っています。

先述の「怒られるまでやってみる」とともに私が心がけていることは「まずは教師が楽しみ方見本を示してみる」ということです。教師が楽しんでいる授業は、自然と生徒も楽しみながら学ぶようになってくると日頃から感じており、それはさらに、他教科の教師へも広がっていくのではと信じています。こうして輪を拡げていくことで、先述のような学校をつくっていくことも、決して夢ではないかもしれないと感じています。



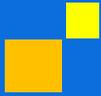
鷺頭 弘子 わしず ひろこ

2018年4月よりミドルリーダー養成コースに入学いたしました鷺頭弘子です。よろしくお願いいたします。現在、神奈川県川崎市にあるカリタス女子中学高等学校に勤務しております。

担当教科はフランス語です。本校はカナダのケベック州にあるカリタス修道女会のシスターによって1961年に建てられました。近くには多摩川が流れる自然豊かな土地にあり、自律した学習姿勢を持った生徒を育てたいという思いから、校舎は生徒が教科教室へ毎時間移動する教科センター方式となっています。創立当初から英語フランス語の複言語教育を行っており、中学では全員が英語を第1外国語、フランス語を第2外国語として学び、高校ではフランス語を第1外国語として選べるコースも設置しているのが特徴です。私自身、本校を卒業しており、母校に戻ってからはフランス語の授業を通して外国語を学ぶ楽しさを伝えるとともに、複数の言語を学ぶことで1つの方向からではなく、幅広い視野を持ち、言葉の背景にある文化やそこに暮らす人々を理解できる人になってほしいという思いで授業を行ってきました。現在はICT化も進み、「聞く」「読む」「話す(やりとり)」「話す(発表)」「書く」の5つの領域の力をバランスよくつけられるようにCEFRに準拠した新しい教材を使い、試行錯誤しながら取り組んでいます。

グローバル教育を推進する委員会の中では留学や語学研修の運営を行う一方で、海外に目を向けるだけでなく、多角的に物事をとらえ、学び、考える生徒を育てることを目標とする教科横断型授業を提案、実践しているところです。最近自分自身の取り組みということだけでなく、先生方といかに協働していくか、組織の中での自分の役割について考えることが多くなってきました。教員それぞれの専門性向上はもちろんですが、学校全体が活性化していくために、集団によって生み出される力の必要性和重要性を肌で感じています。

慌ただしさで追われるように日々が過ぎていく中、今回、教職大学院で学ぶ機会をいただけることになりました。今の教育改革の動きを先生方とともに考え、学ばせて頂けることに感謝し、それをいかに現場で実践していくかという使命を与えられたと思っています。先日、初めての合同カンファレンスに出席しました。自分にはない視点から学び、お互いの経験に共感し、過去に自分が抱いていた疑問や情熱を思いだした2日間。異なる世代、校種の先生方と語り合うことは想像以上のものでした。先生方から刺激を受けたのと同時に、考えが整理されたようなすっきりした感覚が残った新鮮な経験でした。変化していく社会へ羽ばたく生徒たちへ還元していけるよう、大学院で学びを深めていきたいと思っています。



インターンシップ/木曜カンファレンス報告

悩みは尽きません

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 谷口 貴一

新しいM1を迎え入れ、早くも3年目が始まりました。最近、M3になりどのようにインターンシップや木曜カンファレンスに取り組んでいこうかと悩んでいました。これまでは常に頼りになる先輩がいて、不安なことがあれば何でも聞くことができ、頼ってきました。しかし、4月からは私がM3という最高学年としてどのようにM1・M2と関わり、支えていけばいいのだろうか考える機会が多くなりました。先輩として手取り足取り“教える”のではなく、中心となって頑張っているM2や精一杯頑張ろうとするM1と“共に考える”ことや“見守る”ことが大切だということは感じています。しかし、その匙加減を間違えると自己の経験を押し付けてしまったり、放任してしまったりすることになり頑張っているM1・M2の学びの機会を摘んでしまうのではないかと不安も感じています。現在はそのバランスを模索している状態です。

上記については院生の関係のみならず、インターンシップにおける子どもとの関わりにおいても同様のことが言えるのではないかと考えています。答えを与えるのではなく、学びの主体である子どもの目線に合わせ、子どもの考えや躰きを把握し、子どもが自ら考えられる機会を生むことが大切だと考えています。そのための「待つこと」と「伝えること」の塩梅は非常に難しいと感じています。どちらかが多すぎても少なすぎてもダメ。このような絶妙な関わりを院生間やインターンシップでの子どもとの関わりを通して悩みながら学んでいます。院生と子どもどちらの関わりにおいても、共に歩む姿勢を忘れずに学び合っていきたいと思います。

木曜カンファレンスの中でも悩む場面がありました。これまでの歩みを振り返り、今後の展望を語る機会がありました。これまでの歩みの中で自分が学んできたことは何なのか、それが正しいと言い切っ

ていいのか等、自身の学びを捉え直しました。誰かが教えてくれるわけでもなく、決まりきった答えもなく、これまでの2年間で私は本当に学ぶことができているのだろうかという不安も感じました。しかし、このような自身に対する不安を払拭する気づきがありました。それは今年度の教員採用試験へ向けて、志願書に記載する志望動機を考えている時のことでした。昨年書いたものを参考にしようと思い、昨年の志願書のコピーを手に取り見直していると「もっと書けることがあるなあ。」と感じました。そこには確かに1年目のインターンシップを通して、教員として大切にしていきたいと感じたことが書かれていたのですが、私の2年目の学びが欠けていました。「もっと書ける！」と思ったと同時に「1年、1年を通してちゃんと成長しているんだなあ。」とも感じました。それまで不安に感じていた自分に少し自信を持つことができました。また、自信を得ると共に3年目の課題にも気づきました。それは過去の自分の記録に目を通すということです。昨年の志願書を見て感じることもあるということは、これまで書き続けてきたインターンシップや木曜カンファレンスの記録の中に、私が忘れていた大切な視点や新たな気づきを与えてくれる過去の自分がいるのではないかと考えています。記録を見直すことがインターンシップや木曜カンファレンスの充実にも繋がり、今年度の最大の試練でもある長期実践報告の執筆に関しても大変重要な役割を担うのだろうと感じています。これまでの記録に目を通し、過去の自分からも学んでいきたいと思っています。

3年目を迎えても悩むことばかりです。しかし、その中に新たな気付きや成長を実感することも多々あり、楽しさや歓びを感じます。これからも悩みと上手く付き合っていきたいと思っています。

集団の中で個を育てる

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 佐藤 琢磨

福井に来て3年目の春がやってきた。小学校免許取得プログラムを履修しているため、大学院の中では最上級生であるM3になった。大学院を卒業したあとは、現場に出て、日々校務をこなしながら、授業や生活指導、学級経営の中で、子どもたちと関わっていかねばならない。

私は、現場に出ることが楽しみで仕方がない。早く学校で働きたい。授業や学級経営、部活動指導も、思いっきりやってみたい。大学院の同期メンバーや先輩方の多くは、現場で働き始めている。私も、仲間たちと同じように、思いっきり自分の実践をしてみたい。

今年一年は、大学院や実習先の先生方、大学院の仲間たち、子どもたち、そして、何より育ててくれた家族のおかげで過ごせる「猶予期間」だと考えている。周りの人に感謝する気持ちを常に持ちながら、自分を徹底的に追い込み、鍛え上げる一年にしたい。教師が自身の課題と向き合い、弱さをさらけ出しながら、全力でもがいている姿を見せなければ、子どもの心に響かない。

だからこそ、今年は「教師の本分」と向き合う年にしたい。私は、「教師の本分」とは、「集団の中で個を育てること」と考えている。具体的には、子どもの見取りに基づく集団指導と、知的追求のある授業である。

去年までは中藤小の2年生で実習をさせていただき、今年は3年生に持ち上がらせていただいた。今年は、朝の会や帰りの会など、様々な場面で子どもの前に立って話す機会をいただいたり、音読や漢字学習の指導をさせていただいたりしている。同時に、大学院の仲間と自主的に行っている「模擬授業の会」や、昨年までのメンターの先生をはじめ、実践家の先生方が行われている自主研究会に参加し、授業づくりについて学びながら、一か月一小単元以上の授業を実践しようと構想している。子どもの「やりたい」という思いから始まる探究型の学習にも取り組んでみたい。

現場の先生方にとって、いわゆる「黄金の三日間」から始まる4月は、勝負の時である。子どもに規律を示し、班や係などのシステムを確立し、子どもたちと共に学級集団をつくりあげていく。一人一人の子どもに厳しくも温かく、粘り強く向き合い、誰もが安心できる居場所を目指し、日々指導と支援にあたる。

私は、大学生の時まで、子どもを叱ることができなかった。しかし今では、命に係わること、心を踏みにじること（差別や偏見、いじめ、努力している子どもを笑うことなど）、そして、3回同じ注意を受けることは叱ろうと思っている。それは、学級のメンバー全員を大切にすることである。子どもの声に耳を傾けながら、時には厳しく叱り、時には理由を説明して諭し、時には「なぜこうなったのか」「どうすれば防げるのか」と子ども自身に考えるよう促しながら、なんとしても子どもが学習できる場所を保障しようともがいている。

同時に、子どもが頑張っている姿は、学級新聞や朝の会・帰りの会・全体指導中の語りを通じて全体に広めている。個人名を上げ、具体的に力強く褒める。「ありがとう」「助かったよ」と、子どもに自分の思いを伝える。朝や帰りの挨拶では、子ども一人一人の顔を見て、時には一人一人とハイタッチして「あなたがいてくれて嬉しい」と全力で伝えたい。

メンターの先生は、私の指導を見てくださり、子どもの意見の拾い方や、指導の仕方、指示・説明の仕方を、実際に示して、アドバイスしてくださる。子どもに対する細やかな指導・支援は、今の私に足りない物である。存分に「真似び(学び)」、自分のものにしていきたい。

実習先の先生方は、院生を温かく迎え入れてくださり、子どもの話や指導のアドバイスを毎日教えてくださる。例えば、学級通信を出されている先生は、院生の机に通信を分けてくださる。また、私が出している新聞を読んで頂いている。「いいね」という言葉はとても励みになる。温かくも互いを鍛え合う職員室は、私たち院生にとっての居場所でもある。

今年は、中藤小に、フレッシュで志あふれる院生が新たに2人加わった。そのうちの一人である家高院生は、同じ学年の配属になり、とても頼もしく思っている。仲間たちと鍛え合いながら、皆に負けたくない、熱い思いをもった教師になりたい。

今は仲間や先生方と一緒に、国語の授業を構想している。目の前の子どもたちは今、ギャングエイジに差し掛かり、仲間との結びつきが強くなっている。また、自我も強くなり、自分の主張をしようとしている。そんな伸び盛りの子どもたちを相手に、早く授業で勝負したい。

最後に、自分への戒めとして、昨年度のメンターの先生からいただいたお手紙の一節を載せておきたい。

教育というのは、泥臭い仕事です。これでいいということがありません。

でも、必ず子どもは育てたように育つということです。子どものせいや、親のせいにせず、常に自分の授業はどうだったか、対応はどうだったのかをふり返り、チャレンジしてください。

越冬

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 松木 巧

信じられないような大雪に見舞われた冬を越え、いつの間にか雪も解け穏やかな陽気に包まれる今日この頃。院生生活も2年目に突入し、早1ヶ月が経つ。インターンシップは引き続き中藤小学校の特別支援学級でさせていただき、大学院では新たな仲間との学びが始まっている。しかし、立場や環境が変わった中で自分はどのようにしていくべきなのか、依然として私の心には今冬の雪のような不安がある。そこで、これまでの学びや今後の展望を記すことで、この不安を解消していけたらと思う。

この春からはインターンシップを週1回にさせていただいている。子どもたちと関わり合う場面が減った分、真摯に向き合おうという気持ちが一層増している。これまで大切にしてきたことは主に2つだ。1つ目は、子どもたちの行動の理由を探ること。2つ目は、学習場面や生活場面のスモールステップとそれを乗り越えるための支援について考えることである。これに加え、今年度から意識していきたいことがある。それは、子どもたちが自分の力で課題を乗り越えるための心の余裕をつくることだ。これによって、他者とのコミュニケーションの中での譲り合いや思いやりを育てていきたい。そのために、子どもたちのがんばりやよい取り組みなどを認め、言葉にして返すことで安心感や自己肯定感をもてるように意識していく。その場に応じた直接的な支援と、その場に立ち向かう心を養う間接的な支援の2つを関わりの中で考えていくことが今の目標である。

週間カンファレンスにおける私の立ち位置も少し変わったことを実感している。新年度が始まり、M1の院生数人から「記録の取り方が分からないんです。どうやって書いてますか？」という質問をされた。これより、「今、M1に共通する関心事は記録についてなんだ。」と考えたM2で、記録についての主担当企画を行うことにした。会議の結果、この1つ前の

企画で引き出したなりたい教師像と、そのために必要な要素を参考に、同じグループのM1に適した記録の書き方を一緒に考えていこうということになった。実際にカンファレンスで話し合うと、私のグループのM1はなりたい教師に必要な要素が複数あった。記録もその日にあった子どもの様子をできるだけ全て書こうとしていた。このように書きたいことが焦点化されていないのは、インターンで大切にしたい視点や要素を絞れていないからではないか。そう考えた私は、彼が大切にしたいことを絞れるように声を掛けた。その後、その視点を身につけるためにはどのようなことを書き残すとよいか、見やすい記録にするにはどうしたらよいかなどを、できるだけ彼自身の言葉から考え、導いていくことを心掛けた。話し合いが終わると、疲労感と充実感が押し寄せた。昨年にはなかった類のものだ。これは何によるものだろう。今年心掛けているのは『M1にとって収穫のあるカンファレンスにする』ということだ。この意識をもとに、考えを引き出し、そこから悩みを見つけ、その解決のために話し合いを進めていった。はっとした。昨年までの参加者の立場から、話し合いを進める立場に変わること聞き方が変わったのだ。問題を見つけて、解決の糸口を探していくこのファシリテーターという立場での学びは、もしかすると今求められている学びの形に通じるものなのではないか。今、この報告を執筆しながら気づいて少し鳥肌が立ちそうである。書くということは、自分の認知していなかった学びに気づくための活動になるということ、改めて体感した。

立場や環境が変わったことで、まだまだ新鮮な学びを得られる。今年度も面白くなりそうだ。いつの間にか不安を晴らす光明がさしていた。冬を越えて、今は春である。

2年目に入って

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 竹本 瑞季

福井大学教職大学院に入学して2年目に入った。去年は週3回インターンに行っていたが、今年は教員採用試験の勉強のため、週に一度インターンに行っている。また、去年と変わらず今年も週に一度大学で週間カンファレンスが行われている。

インターンでは去年は3年生のクラスに入っていた。今年は4年生のクラスに入ることになり、学年もクラスも去年と変わらない。クラスのメンバーも去年と同じなので、子どもたちは新しい学年にあまり緊張することなく馴染んでいるように見える。私もインターンにまだ3日しか行っていないが、去年の4月ごろと比べると子どもたちは大きく変化したとを感じる。最初は先生に言われてやっていたことを自分で出来るようになってきている子もいるし、まわりの子に優しく声を掛けている子が多くなった様子を見る事が出来た。去年1年間のうちに、子どもたちは一人一人としても全体としても変化したことを身近に感じる場面が多かった。今年は学年が上がり、高学年に近づいて、さらに子どもたちが成長していく様子を見る事が出来ると思うので、楽しみにしたい。また、私は今まで自分自身の学生生活やボランティアなどをしてきたなかでも、2年連続で同じクラスだったという経験がないので、子どもたち同士がよくお互いを知っているクラスならではの様子を見る事が出来ると思う。去年は1年間を通して子どもたちと関わる事が出来たが、まだまだ一人一人の子どもたちとどのように関わったら良いのか迷うことがある。少ない時間の中でも子どもたち一人一人とよく関わるようにしていくことを大切にしていきたいと思う。また、子どもたちの変化や良いところを見つけ、伝える事が出来るようにしていきたい。そして、子どもたちと関わったり、先生方の指導を見せていただいたりしていくなかで、「どうしてだろう」「なぜこうしているのだろう」と考えることを心掛けるようにすることが大切だと思う。

去年から今年にかけて授業を見せていただく機会が多くあった。その機会を通してクラスにいる子

どもたちが参加している授業をたくさん見ることが出来た。そしてそのような授業が子どもたちにとって良い授業なのではないかと感じた。去年は授業をする機会も何度かいただき、算数や道徳の授業をしたが、子どもたちへの課題を考えたり、分かりやすく説明をしたりするのが難しかった。何をしたら良いか分からないという子がいたり、進めるのがはやくすぐに課題が終わってしまう子がいたりして、そのような子どもたちみんなが参加している授業には程遠いものだった。子どもたちにとって分かりやすい授業をするためには、もっと私自身の説明の仕方や授業前の準備を工夫したり、子どもたち一人一人のことを考えたりすることが必要なのだと感じた。そのためにも今年は子どもたち一人一人のことをもっと理解できるように努力したり、教科ごとに単元についてもっと知れるよう努力したりして、導入や目標、発問など準備を大切にしていきたい。子どもたちに身につけてほしいことが曖昧だったり、分かりやすい説明が出来なかったりといった反省もあったので、去年の反省を活かした授業にチャレンジしたいと思う。

週間カンファレンスでは小グループとなり、インターンの振り返りをしたり、自分がどのような教師になりたいかについて考えたり、授業づくりについて考えたりしている。また、去年は手探りしながらPISAの問題を作ったり、教科の意義などをじっくり考える機会があったりして、普段あまり考えていなかったことについて考えるきっかけとなる時間にもなっていた。これらの活動は同じような悩みを持っている人の話を聞けたり、自分一人で考えていては気づけないことに気付く事が出来たりする時間となっている。

教職大学院で学ぶのもあと一年となった。インターンでの子どもたちとの関わりとのなかで気付いたことと、週間カンファレンスでの活動を照らし合わせながら、学んでいけたらと思う。

変わること、変わらないこと

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井市至民中学校 渡辺 碩太

大学院での学びも2年目になった。2年目の長期インターンも至民中学校（以下 至民中）でさせていただけることになり、喜ばしい限りである。新年度となり、至民中でも立ち位置が変わり、短いようで長い1か月が経過した。その流れとともに私の学びを振り返っていく。

授業研究・教職専門性開発コースの院生は、2年次（以下 M2）から拠点校での実習に向かう回数が減ってしまう。その理由は教員採用試験のための勉強や木曜カンファレンスの運営、大学での講義（小学校免許プログラムなど）と大学で行わなくてはいけないが増えるからである。1年次までは週に3日、多い時だと部活指導も合わせて週に5日ほど学校に足を運んでいた。しかし、4月からは基本週に1日、多い時で週に2日ほどである。学校に足を運ぶ回数が減ることで、生徒たちと関わりを築くことが困難になる。これは多くのM2の悩みでもあると思われる。私も実習時に生徒に声をかけると「先生、なんか久しぶりやね」と言われることがある。今まで多くかかわってきたのが分かる反面、今の現状にもややもやしてしまうこともある。

学校に足を運ぶ回数は減ったが、幸いにも入っている学年団と私の指導教諭の先生は変わらなかった。（今年もよろしくお願ひします）最初の学年集会では2学年の先生方全員が前に立って生徒に話をした。私は、「名前の呼び方」と「至民中に来る回数が減ること」を生徒に話した。名前の呼び方については名前の呼びやすさからなのか「げんた先生」や「げんたくん」と呼ぶ生徒が何人かいた。しかし、先生という立場である以上、「わたなべ先生」に統一するための話をした。生徒に与える印象も強かったのか「げんた先生…じゃなかったわたなべ先生」と言い直す生徒が増えてきたことで、全体の前で発言することの効力を実感できた。

1番大きな変化であった部活動について書こう。部活動の担当が陸上部副顧問から男子バトミントン部副顧問となり、驚きを隠せなかった。「陸上部で生徒との関係や指導を1年かけて学んできた。もっと陸上部での関わりを持ちたい。顧問の先生や生徒とともに学んでいきたい」という気持ちがあった。しかし、その願ひはかなわなかった。また、バトミントンもほとんど経験がないという状態で、どのように生徒と関わるか、指導していくか全くわからなかった。そこで、実習で学校に訪れた時には必ず体

育館に顔を出した。昨年度までの陸上部では技術指導などができなかった私は「生徒と共に動く」ことを大事にして同じ練習をしていた。その経験を活かし、男子バトミントン部でも同じように練習を一緒に行うことからスタートした。男子バトミントン部は顧問が指示をしなくともキャプテンを中心に練習を考えることができるチームであった。しかし、小学校からの経験者と中学から始めた生徒の差が大きいことが課題である。経験者は自分たちで考え、練習する一方、中学から始めた生徒はキャプテンが与えた練習をしながら時間が終わるのを待つという様子が見られた。体育館では多くの部活動が練習しているため、一度に練習することができない。経験者の方がコートを使う時間が長くなる。コートが使えない時には、廊下や広いスペースでトレーニングを行うのだが、中学から始めた生徒たちのトレーニングを見に行くと、床に座ってしゃべっていることがあった。そこで、陸上部での練習を生かして、体幹トレーニングを指示した。すると、上手にはできないが一生懸命に取り組む姿が見られた。練習をしたくないわけではなく、どのように練習すれば上達できるかわからないということを生徒から感じとった。私自身も陸上部で生徒と関わった経験から、バトミントン部の生徒に指示を出すことや指導を行うことができていた。生徒の様子から考えを広げることやその手立てを与えることが可能になったのは一年間の学びがあったからだと思う。顧問の先生も今年度から至民中に赴任されたばかりで、顧問・副顧問のどちらともが右も左もわからないなかでのスタートだった。顧問の先生はバトミントンの専門的な指導ができる方だが、トレーニングなどの知識に対してはあまり自信がないとおっしゃっていた。私は昨年1年間で学んだ陸上部での経験を基に顧問の先生をサポートしていけたらよいと考えている。それがまさしく「協働」ではないかと考えている。バトミントン部の課題を解決し、チームという集団を向上させるための手がかりを顧問、生徒と共に求めていきたい。

改めてこの1か月を振り返ると、集団との関わりについて視点が偏っているように思われる。悪いことではないと思うが、個人への視点や関わりが薄くなっていることが、このニュースレターを書いているところである。私のような副担任や副顧問といった立場では集団の中の個人をみる機会が多いと

思われる。集団の中の生徒一人ひとりの声や行動を注意深く見ることで、場と状況に応じた支援を与え

ていけるようにしていきたい。

4 月合同カンファレンス報告

4 月合同カンファレンスに参加して

学校改革マネジメントコース 2 年/坂井市立丸岡南中学校 奥村 弘美

絶好の行楽日和の連休前半、爽やかな風を受けながら、若干重い足どりで4月合同カンファレンスへと向かった。

何故だろう、いつもはカンファレンス出席がとても楽しみなのに。1年前の初カンファレンスも、様々な出会いや新しい学びへの期待感と、よおし頑張るぞ！という意気込みから颯爽と6階へと続くエレベーターに乗り込んだものだった。自己紹介から始まるセッションでは、しっかりと語り口で今までの取組を語る2年目の先輩方や、自分の疑問や迷いに自身の実践を交えながらさりげなくアドバイスしてくださる先輩方の素晴らしさに、「自分も1年後にはこうなりたい！」と思った。

あれから1年、大学での学びもあつという間に折り返し地点に来た。果たして自分はなっていたい自分に近づいたのか、そして残された1年で今の研究に区切りがつけられるのか、また、あの長い長い長期実践研究報告を本当に書き上げることができるのか。いろんなことを考え、自分の成長のなさを反省し、少々暗い気持ちになりながらも6階コラボレーションホールへとたどりついた。

この2日間は、1年間の大学での学びを凝縮したプログラムとなっていた。セッションでお互いに語り合いながら自分の課題の輪郭をつかみ、理論書の抜粋部分や教育改革に関する資料を読み進めて自分の実践に関係する部分について語り合う、さらに先輩方の書かれた長期実践研究報告書を読む。読みながら先輩方の実践の足跡をたどり、成功やつまずきの要因、転機となった出来事を探り、特に自分の実践に合わせて深めたい部分に立ち戻りじっくり読み深めていく。その後のグループセッションでは、自分が読んだ実践研究報告書について、作成したレジュメに従い自分の取組と照らし合わせて語る。最後のセッションでは、この2日間で学んだことをもとに今後の展望を語り合う。まさに自分が昨年体験した1年間のプログラムそのものである。

ホールにて、昨年度お世話になった大学の先生方の笑顔をお見かけし、一気にホーム感に包まれた。心の中の暗い雲がどんどん薄くなっていき、やりたいことを実践し、目標に向かって歩いている前向きな自分に引き戻された。気持ちも引き締まってきた。セッションが始まり、3つの種をもとに自己紹介が始まった。昨年何回となくカンファレンスやラウンドテーブルで話し、レポートにも綴ってきたことが自然と口についてでてくる。昨年度の校務分掌で新たに担当となり、自分の中では全くの未開の領域だった「地域とともにある学校づくり」について、地域コーディネーターとつながり、コミュニティを立ち上げ、大学の先生方や先輩方の知恵を借り、同僚と共に絞り出すように取り組んできた。大学への進学があったからこそ、自校での実践がこんなに自分の中で大切に輝くものになっていったのだ。今年度は地域との事業を根付かせたい、そしてスクールプランの実現に一步でも近づきたいという熱意がよみがえってきた。

1日目の午後後半の部では、長期実践研究報告を読み、書き手の成長のプロセスを探る機会が得られた。同じ坂井地区で「魅力ある学校づくり」に取り組まれた林先生の報告書を読ませていただいた。林先生がどのように魅力ある学校づくり事業をスタートさせ、組織を動かし、コミュニティを作り、中学校区の小中全ての先生方がやる気をもって取り組める事業にしていかれたかを知りたかった。実践報告を読んでみると、生みの苦しみと取組課程での紆余曲折が手にとるようによくわかり、すさまじさと共に先生の事業成功への熱意をひしひしと感じた。また根底にあるものは子どもの幸せへの願いであり、子どもに寄り添いながら教員がやる気をもって取り組み、満足できるような取組にしたいという一貫した思いが読みとれた。

最後は、同じ地区、同じコース、同じ校種の先生方とのセッションだった。2日間で学んだことや今後自分が取り組みたいことについて語り合った。今

回改めて自分が強く感じたことは、同僚性を高めるための取組の大切さだ。取組に携わる者それぞれが当時者意識を持って主体的に関わるには、よく語り合いビジョンを共有することだ。今行っていること、今から行おうとすること、最終的に子どもの成長した姿、一緒に取り組んだ教員や地域に見込まれる成長、そのためにどのような過程でいつまでにどのようなことをしていくとよいのか、時間をかけて話合

うことが必要だ。自分も昨年度の組織運営の失敗を繰り返さないよう、大学で学んだことを生かしていきたい。

また新たな1年が始まる。やりたいことがたくさんある。夕日を見ながら帰途に着く足どりに、1日目に感じた重さはなく、気持ちも晴れ晴れとしていた。

4 月合同カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年／奈良女子大学附属小学校 阪本 一英

4月21日・22日の二日間、4月の合同カンファレンスが実施され、私の2年目の教職大学院での取り組みが本格的に始まりました。

思い起こせば一年前、「教職大学院でどのようなことを学ぶのか」「どのように実践研究にとりくんでいけばよいのか」と、緊張しつつ迎えたのが、この4月のカンファレンスでした。中でも、一番記憶に残っているのは、前年度の卒業生が書き上げられた長期実践報告書を時間をかけて読み、そこから学ぶことをこれまた時間をかけて話し合ったことです。これまで、このような長期にわたる実践記録を時間をかけて読むこともありませんでしたし、じっくりと意見を交換するということもありませんでした。これまでとは一味違った教職大学院での学び方が、とても新鮮に感じられました。その一方で、わずか2年間の間に、このような長期実践研究報告を書かなければならないことが頭から離れず、自分が書きたい研究報告を探すことにはかなりの時間をかけてしまったことも思い起こされます。気になるタイトルの報告書を手に取り、大まかに中身をたどっては次の報告書に手を伸ばす。そんなことを繰り返した挙句、やっと選んで読み始めた報告書も途中で読むのをやめ、次の報告書に手を伸ばしてしまい、結局、どっちつかずの報告をして話し合いに臨んでしまいました。

それに比べると、今年は直ぐにどの報告書を読むのかを決めることができました。一年間のカンファレンスやラウンドテーブルを通して、何人かどのような取り組みをされているのかに触れさせていただいた方もおられますし、それらの方が、どのように

長期実践研究をまとめられたのかの興味も覚えていたからです。実際に読み進めてみると、本当に参考になることがたくさんありました。論点をはっきりしていて簡潔で、それでいて読み応えのある書きぶり…（これは、私自身の文章が、ついくどくどといういろいろなことを書き連ねてしまう傾向にあることを、痛感させられました。不必要なことをそぎ落としつつ、論点を見失わずに書くことが重要になりそうです）、教員生活の振り返りの部分の記述が、現在の学校改革の視点や考え方につながっている点…（今まで触れるつもりがなかった自分の教員生活の中にも、今現在の考え方につながる稜線があることにも気づきました。また、過去のできごとと現在の考え方がリンクするような書きぶりも重要になりそうです）、二年間の教職大学院での学びが、どのように現在の学校改革にいかされているのかという視点での記述…（私にも、斎藤喜博先生の記録やコミュニティプラクティスを讀んだことで生まれた考え、伊那小学校や忍野小学校の研究とつながって学んだことなど、書くべきことがあることを改めて考えさせられました）等など、本当に勉強になりました。

4月の合同カンファレンスの、「実践的な自己紹介」「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」「長期実践研究報告書を読む」そして「教育改革の方向性、専門職としての実践と学びの跡づけを踏まえ、今後の実践と学び方の方向性と課題を探る」という四つのサイクルを重ねていく中で、改めて今年一年間の自分の歩みの方向を見定め、決意を新たにすることができました。この一年も、どうぞよろしく願います。

4 月合同カンファレンスに参加して

－不易と流行－

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市明新小学校 山岸 千尋

新学期が始まり一か月が経とうとしている。花便りが各地から届くこの頃、4 月の合同カンファレンスが行われた。長期インターンシップ（以下インターン）も 2 年目となり、新しい気持ちで心機一転、日々の生活を送っている。

カンファレンスに先立って、岸野先生から 2 日間の内容について説明があった。「このカンファレンスの正式名称は合同カンファレンスという。合同というところに意味があり、世代・校種を越えて協働探究する（ともに学び合う）機会である。他者から新しい視点を得たり、自分の実践を振り返って他者に伝えたりすることも重要である。」という言葉が印象的であった。

カンファレンスは 2 日間あり、4 つのサイクルに分けられていた。Cycle1 では、小グループで「三種の種」をもとに実践的な自己紹介を行った。私は、白川文字学に関する授業実践をしたいと話した。ただ、「白川文字学をどう教えていこうと思ってる？」という質問にうまく答えられなかった。自分がどんな授業をしたいかだけでなく、どのように授業を進めるかというビジョンがなかったからだと思う。最初の「興味関心があるからやりたい。これまでできなかった教科に挑戦したい。」という思いは大切だが、「白川文字とは何か、どういう工夫をするか」といった具体的な考えを持っていなければ授業はできないのだと実感した。一方で、若狭高校の小坂先生や附属特支の小嵐先生は、明確なビジョンを持っていた。小坂先生は探究的な学習の意味を考えたり卒業後の生徒の変容を見たりと実際に経験されていることも多いが、「（生徒が）なぜ、そう変容したのか。」「どういうコミュニティが生徒に影響を与えたのか。」細かいところまで考えていた。小嵐先生は、「協働」について語っていたが、「障害のある生徒の協働とはどんな姿なのだろう。」という疑問から、教師の支援の在り方を探っていくところが興味深かった。「協働ってどういうイメージ？」と聞かれると、学校では話し合い活動が思い浮かぶが、それだけではないだろう。先生にとっての協働も子どもにとっての協働もきっと違う。

Cycle2 では、3 つの資料の中から 1 つ選び、その資料を読み進めていく。私は、中央教育審議会の答

申を読んだが疑問だらけで自分の実践と照らし合わせることはできていなかったかもしれない。しかし、資料について語り合うときに「教科横断ってどうしてしなければいけないのだろう。」という私の疑問から話が広がることがあった。「なんで？」「どうして？」と分からないことを気兼ねなく聞けるのもこのカンファレンスの良いところだと改めて感じた。Cycle3 では、長期実践報告を読んで、それをもとにグループで語り合った。私は、昨年修了された北本院生の長期実践報告「教師の役割を探す—子どもたちと関わりながら成長していく 2 年間」を読ませていただいた。私は 2 年目なので、自分がどう長期実践報告を作成するかということも考えながら読んだ。

1 年目の頃は、実践の展開を支える（阻む）要因や実践展開をどのようにとらえ直し著すかなど考えられていなかった。「早く自分の考えをまとめなければ…」という思いが先立ち、余裕もなかった。しかし、1 年の経験を経た今では、以前より書き手に寄り添って読むことができるようになった気がする。北本院生の長期実践報告を読んで、共感できる部分が多くあり「皆同じことでつまずき、悩んでいたんだな。」と知ることができた。長期実践報告の中で「普段の生活の中で子どもどうしの関わりが授業の中でも出てくる。」と綴っている。授業を行って、子どもにとっての授業の重要性を実感したが授業をすることだけが教師の役割ではないという北本院生の強い言葉もあった。この言葉は、私が 1 年間インターンに励んできて学んだことでもあった。

Cycle4 では 2 日間、読み進めてきたことや語り合ってきたことを踏まえて今後の課題とそれに対するアプローチを探った。この場では北本院生が書いた言葉に対し、「教師の一番の仕事は授業することやし、授業せんと分からんこともあるやろ。」と反論があった。確かに、学校では子どもと関わる大半が授業であり、授業が上手な先生は人気がある。それでも私は、教師であっても授業実践だけでなく子どもを後ろから支援するインターンシップ生の立場が必要だと思った。

今回の合同カンファレンスでは自身の経験を語り他者の視点も取り入れることで気づかされることもあれば、どれだけ話し合いを重ねても揺らぐことの

ない自分の信念（軸）を見つけることもできた。今もつなげていきたいと考える。
回、発見した新たな学びを今後のインターン生活に

福井大学教育学部附属幼稚園公開保育のご案内

研究主題 つながりが育む学びの深まり～試す、工夫する、つくり出す遊びを求めて～

期日 平成30年6月9日（土）

会場 福井大学教育学部附属幼稚園

〒910-0015 福井市二の宮4丁目45番1号
TEL 0776-22-6687

内容

- 公開保育（9:20～11:20） 各保育室および園庭（雨天時遊戯室）
- 全体会（11:30～12:10） 遊戯室
来賓挨拶
研究概要説明
- 学年別分科会（13:10～14:40）
- 講演（14:50～15:50）
無藤 隆 先生
白梅学園大学大学院特任教授
文部科学省中央教育審議会委員
内閣府子ども・子育て会議会長
国立教育政策研究所上席フェロー

参加申し込み

- 申し込み期限 平成30年5月31日（木）
- 参加人数 150名（定員になり次第、HPにてお知らせし、締め切らせていただきます）
- 分科会について 学年別分科会は、ご希望の学年をご記入ください。ご希望を最優先させていただきます。
- 申し込み方法 別紙の申し込み用紙に必要事項を記入の上、下記宛てにFAXでお送りください。
FAX 0776-22-6718

参加費

1000円

詳細は福井大学教育学部附属幼稚園のホームページをご覧ください。申し込み用紙のダウンロードもできます。
<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzokuyo/>

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) / AOSSA

6/22 Fri. 17:30-18:40 プレセッション @コラボレーションホール

6/23 Sat. 13:00-17:40

13:00-13:10 オリエンテーション
13:10-14:10 ナレッジ・フェア (ポスターセッション)
14:20-15:50 シンポジウム
16:00-17:40 フォーラム

Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ
～次代の社会を担う人材育成を目指した新たな学校づくり～

Zone B 教師教育

B1 福井県と福井大学は、協働の中でどんな教員研修を目指すのか？”

B2 これからの教員養成を学部・大学院を通して考えるー実践を聴き、夢を語るー

Zone C コミュニティ 持続可能なコミュニティをコーディネートする一つながりの編み直しを支えるー

Zone D 授業研究 子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか
～子どもたちの探究的な学びを支える教師の協働探究～

6/24 Sun. 8:20-14:00 ラウンドテーブル・クロスセッション

申し込みは、福井大学教職大学院ホームページにある参加申込書 (Excel ファイル) に必要事項をご記入いただき、福井大学連合教職大学院代表メールアドレス (dpdtkfukui@yahoo.co.jp) まで添付ファイルにて送付ください。

Schedule

6/16 Sat 教職大学院カリキュラム説明会

6/22 Fri - 6/24 Sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions

7/7 Sat 7月合同カンファレンス (A日程) 文京会場 嶺南会場 東京会場

7/14 Sat 7月合同カンファレンス (B日程) 文京会場 奈良会場

【編集後記】 福井大学連合教職大学院では、今年度からの新たな取り組みである、シンガポールにある南洋理工学国立教育大学院 (N.I.E) との協定にもとづく国際インターンシップ (5週間) が5月9日より始まりました。現在2名の学生が附属義務教育学校で学んでおり、今後は週間・月間合同カンファレンスへの参加や、本ニュースレターへの寄稿も計画しています。国や地域は違っても、志は同じであることを感じています。二人に出会ったら声をかけていただくと嬉しいです。(半原)

教職大学院 Newsletter **No.110**

2018.5.19 内報版発行
2018.5.30 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtkfukui@yahoo.co.jp